

## 計画 9-6

ウイルスの潜伏感染を維持する宿主  
機構 石田貴文 (東大・理)

潜伏感染を示す S T L V や s - E B V はその宿主の生涯を通して概ね不顕感染の状態をとるが、その「宿主-ウイルス」をとりまく状況によって顕性になることがある。本研究では、これらサルウイルスに潜伏感染を成立させている宿主側の因子を血中に想定し探すこととした。

H T L V - 1 感染ヒト細胞株を抗原として蛍光抗体法によりニホンザル血清をスクリーニングし S T L V - 1 感染個体と非感染個体を同定した。感染個体・非感染個体より血漿を得被験血漿とした。感染個体中培養下で末梢リンパ球にウイルス感染細胞が同定される個体を細胞ドナーとした。細胞ドナーサルより得た末梢リンパ球を、P H A 存在下で被験血漿を種々の濃度添加し短期間培養した。培養したリンパ球の塗末標本作製し、蛍光抗体法を用いウイルス抗原の発現を調べた。

その結果、陰性個体より得た血漿はウイルス抗原発現を抑えなかったが、陽性個体より得た血漿は濃度に依存してウイルス抗原の発現を抑えることがわかった。このことは、ウイルス感染個体にウイルス発現を抑制する因子が存在することを示唆した。

## 計画 9-8

サル類に寄生するアメーバの病原性に  
ついて 橘 裕司 (東海大・医・感染症)、  
小林正規 (慶応大・医・熱帯医寄生虫)、松林  
伸子、松林清明 (京都大・霊長研)

霊長類の腸管に寄生する赤痢アメーバには、病原性のある株 (病原株) と病原性のない株 (非病原株) が存在することが最近明らかになり、非病原株は別種 (*Entamoeba dispar*) と考えられるようになってきた。しかし、サル類に寄生している赤痢アメーバの病原性解析はほとんど行われていない。そこで、京都大学霊長類研究所内で飼育されている各種のサルについてアメーバ類の感染状況を調べ、赤痢アメーバに関して病原・非病原株の鑑別を試みた。

ホルマリン・エーテル法を用いた検便では、274 頭のうち 126 頭 (46%) から何らかのアメーバシストが検出された。最も多かったのは大腸アメーバ (陽性個体数 76) で、以下ハルトマンアメーバ (59)、ヨードアメーバ (27)、赤痢アメーバ (21)、ボレックアメーバ (15)、小形アメーバ (12) と続き、他に赤痢アメーバかボレックアメーバかの同定困難なものが 6 例あった。一方、糞便培養では、8 個体 [ニホンザル (5)、アカゲザル (2)、カニクイザル (1)] から赤痢アメーバが検出された。培養された栄養型虫体について、アイソザイム分析、モノクローナル抗体を用いた抗原性解析、P C R 法による遺伝子型解析を行ったところ、8 株はすべて非病原型であることが判明した。

以上の結果から、飼育マカクでは病原型アメーバの感染は少ないものと考えられた。